
NOW Lording.....

山原青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N O W L o r d i n g

【Nコード】

N O 9 0 1 X

【作者名】

山原青

【あらすじ】

主人公は平凡な高校生。

名前は山原蒼樹。

蒼樹は頭、運動神経は平凡の一言だった…。

だが一つだけ本人が胸を張って得意、好きと言える物があるゲーム……。基本的にデータゲーム。

その中でもRPG。だが、最近になり、唯一生きがいだったゲームでさえも、退屈さを感じずにはいられなかった。

そんな趣味に限界を感じていた蒼樹はある日、あるゲームと出会っ

た事で人生を一変させた……

始まり

ロード中…ロード中…

テレビ画面に映る文字を虚ろな眼で見ながら、俺は傍らに置いておいたペットボトルジュースを手に取る。

キャップを開け、中身を口から流し込むと、それまで乾いていた喉に潤いが戻る。

俺は、ゲーム機のコントローラーを素早く操り、キャラクターをセーブポイントに移動させる。

セーブ完了の文字が出ると同時に、ハードのスイッチとテレビの電源を消すと、画面は今まで眩いばかりの色合いを見せていたはずが、何も映さぬ漆黑に変わった。

今日は朝早くから学校がある。

コントローラーを投げ捨て電気を消して、ベッドに潜り込むと、俺は直ぐ様寝息をたてはじめた…

。

。

。

ピリリリ

携帯電話のアラーム音が、大音量で部屋の中に木霊する。

朝一番に耳を痛めつけられた事に少々 of 苛立ちを感じながらも、俺は軽く手櫛をしたままの手で、携帯電話の目覚ましを停止した。携帯電話の画面から得られる情報によると、時刻は7時30分と、

現役高校生が起きるのに相応しい時間だった。

俺はクローゼットに立てかけておいた制服を取ると、素早く着替え始める。

寝巻きを放り捨て、今だに睡魔を加速させる眼を擦り、部屋の外へと繋がる扉を開いた。

水道で顔を洗い、リビングに足を向けると、朝に似合った良い香りが俺の鼻を通って脳に信号を伝え、食欲を発生させる。

「あ、やっと起きたの？朝ご飯用意してあるわ。さつさと食べなさい。」

俺は母親に軽く返事をして、椅子に座ると、貪る様に朝食を平らげていく。今日の朝食はウィンナーエッグにサラダだった。

パンにバターを塗りながらも、他の物を詰め込んでいく。最後のウィンナーを箸で落とさない様、器用に摘み、今だに色々な食材が混沌と混ぜられている口の中に勢いよく放り込む。

パリパリと良い音がして、口の中にジューシーな肉汁が広がる。

俺は満腹になった腹を軽くさすりながら、大きめのコップに牛乳を注ぎ入れる。

今日は朝から暑かった。

そのせいか、冷たい牛乳が体の芯から冷やしてくれる。

俺は鞆を肩にかけ、今日も学校へ向かうため、革製の靴を鳴らす…。

。
。
。

県立星恭高校…。

他の高校と何ら遜色のない、ありふれた公立高校。

ここで約500名の生徒達が日々勉強、スポーツ、はたまた恋愛に喧嘩… 青春を満喫している。

俺はいつもの様に下駄箱に靴を突っ込むと、踵が踏み慣らされた上履きを床に置く。

自らの教室に向かうため、階段を四苦八苦しながら登る。教室は三階にあり、毎朝登るのには良い運動だ。
煩わしい鞆を持ちやすい位置に調整し、息を僅かに漏らしながら足の上下運動を行う。

俺の教室は今年の春からこの高校の1年2組だ……。

。 。 。

三階に到達すると、ガヤガヤと同級生の声がうるさい。俺は耳を塞ぎたい衝動に駆られながらも、息を整えつつ自分のクラスに入っていく。

クラスは36人構成の普通なものだ。

現在教室には、半分程の人数が登校していた。

部活や係りの仕事などを率先してやっている人もいる訳だから、この人数は普通と言えるだろう。

現在8時15分程……。

俺は教室に設置されている時計を見るのを止め、授業を受けるための席に、真っ直ぐに歩行進路を設定した。

鞆を肩から降ろし、机の横に引っ掛けると同時に、俺の耳に聞き慣れた声が響く。

「今日も朝から眠そうな顔してるね。夜遅くまで勉強でもしてた？」

俺は視界をそっちに向けるのも面倒なので、顔を見ないで返事をする。

「新作のゲーム。RPGのやつ。勉強なんかするかよ。」

「ああ、あのCMで派手に宣伝してるやつね。やったの？」

「ついさつき終わらした。ありゃハードの性能に頼り過ぎだ。画質と迫力で誤魔化してんな。内容ありきたりだったし、正直微妙だった。」

俺は頭を掻きながら盛大な欠伸をし……ようとしたが、なんとか堪えた。

どうやら午前5時まで働いてもらった俺の両目は、とても授業なんて受けれる状態じゃないらしい。

「へえ、でもいつもそんな事言ってるよね。山原が好きになるゲー

ムなんてないんじゃないの？」

山原蒼樹《やまはらそうき》

俺の名前。

「知らねーよ、そんなの…。」

俺は鞆を漁り、朝学校に来るついでに買った、カフェオレを取り出す。

同じ袋に入っていたストローを器用に片手で取り出し、握って机に軽く叩きつける事で封を開ける。

紙パックを開けると、そこに長めのストローを差し込み、口に咥える。

「知らねーって…じゃあ何のためにゲームばっかやってんの？」

俺はストローから口を離し、朝から全くもって会話をしたくない奴と向き合う。

「好きだからだよ。…作品がどうかじゃなくて…。てかお前に言っても、無駄そうだからいいや」

俺はため息を尽くと、再びストローを吸い始める。

「無駄とはなんだ！。無駄とは！」

ああ、うるせーうるせー

「こちとら、朝まで趣味に没頭してたおかげで、寝みーんだよ。カロリーメイトやるからあっちいけ…。」

メイプル味のカロリーメイトを差し出す。

「あたしは、ガキか？…まあ一応貰うけど…。」

異常にテンションが高い、俺の隣人は今日も同様にウザかった…。

俺は一度携帯を確認すると、そのまま鞆に放り込む。飲み終わった紙パックは元入っていた袋に無造作に突っ込み、これも同様鞆に入る。

俺はやる気を感じられない体に少しでも力を取り戻そうと、睡眠を与えることにした。

腕を枕にして、顔をうずめる。かろうじて抑えられていた眠気が一気に俺の瞼を下ろす。

一時間目……数学？英語？……どうでもいいか…。

俺は眠る。

第一話（前書き）

m 誤字、脱字、ご感想などがありましたらお願いしますm（
—）

第一話

授業も終わり、教師の無駄に長つたらしい話も聞き終え、今は下校中だ。

時計の針が4の数字を刺す少し前、特にやる事のなかった俺は帰るついでに行きつけのゲームショップによって行く事にした。

それもこれも、正直これといって仲が良好な奴は俺にはあまりないからだ。

クラスの奴らは仲が悪いとは言えないが、一概に良いとも言えない。暇があれば話すし、たまには一緒に出かける事もある。

ふざけ合ったりも普通にする。

だが、友達とは言えない。

知り合い以上友達未満…といったところだろうか。こう考えると友達の定義は難しいと切実に思う…。

まあ、とにかく何が言いたいかというと、放課後進んでるむような奴はいないって事。

あの女？ハハ、名前も知らねーよ。

その、俺は友達がいなかったという事を、回りくどく説明したわけだが…
つと…

店に着いたか…。

この理由もまた今度。

俺は目の前にそびえ立つ小型のゲームショップを見据える。

扉の前に立つても自動で開いてくれない所を見ると、旧世代の手動式ドアだと言う事が分かる。

2050年にもなって“これ”を使ってる所はそうはないだろう。

俺は取っ手を力いっぱい握り、体重と筋力を総動員させて開けにかかる。

このドアは重さも並じゃない…。

フーフーと走った後のような状態をキープしながら俺は店内へと歩を進める。

「いらつしゃい……ってお前か。」

綺麗にブリーチした短い髪の男は俺の古い馴染みであり、数少ない友人の中の一人だ。

「お前かって何だよ…一応客だぞ?」

俺は労働させられた事により、少々の悪態をつく。

「今更そんな仲じゃないだろう。それにお前に敬語はなんかムカつく。」

カウンターの内側にあるゲームの宣伝ポスターを貼り直しながら、店員らしからぬ発言をする。

この男の名前は長田遊星。

こいつとは、小学校の頃からの付き合いであり、高校で離れたが、今でも恥じらいを捨てれば親友と呼べる奴だ。

「こつちも気持ちわりいよ。それより、クリアしたぞ。」 mono graffiti”。クリア後の裏チャプターの数8個だった。それと、バグはいつになっても残ってるな……」

俺は鞆から表紙が多色のカラーリングで塗りつぶされている箱を取り出す。

それを親指と人差し指で掴み、ヒラヒラと掲げると、遊星はハアとため息をつき、それを受け取る。

「マジかよ……まだ発売して3日だぞ……。で、どうだった？」

「流石に“Repran”の作品には及ばなかったが、まあ、楽しめたさ……っつーのは建前……正直ストーリーとかも微妙だったし、意味の分からんミニゲームとかも中々ウザかった……多分、少ししたら叩かれるだろうな。」

“Repran”……元々、大手資産持ちのゲーム企業会社とアメリカの電子機器精製会社が合併して作られたかなりの有名会社だ。

俺も一度Repranの作ったMMOを物は試しにとやってみた事があったが、見事にはまった。

内容は、出身国を選ぶ事で、魔法が発達している国か科学が発達している国かが分かれその国に戸籍を置きながら、モンスターを殺したり、プレイヤーを殺したり、城を壊したり、車で突っ込んだりとかかなり自由度が高いゲームであった。

基本的に俺はイベント形式で物語がどんどん進行して行くようなモノが好きで、自由度が高く、終わりが見えないネットゲームはすぐに飽きが回る事からあまり好かなかった。

だけどそのゲームは違った。

まるでプレイヤーの望む心をコントロールしているかのように、アップデートでの追加要素は立ち回る”俺達”を飽きさせる事はなかった。

「あ、そういや、Repranといえば、いい情報があるぞ？酒と菓子ぐらいならあるし、俺の部屋行くか？」

遊星が前掛けを脱ぎながら、俺に一つの提案をする。

平凡高校生の会話に”酒”、俺とこいつの関係性、味覚年齢がわかってしまうからいただけない。

「…ああ、そうだな。じゃあちよつと寄って行くかな。」

でも断れないのが俺だろう。

まあ、多分大丈夫だろう。あいにく酒の匂いに気付く程、俺に近づく奴などいないのだから。

俺は笑う。自嘲気味に、微かに。

親父さんに店番を任せると、階段を上がって行く遊星の背中について行く。

。
。
。

「で？ Repranの情報って？」

俺は昔から変わらず日本国民に愛されている例のスナック菓子のうす塩味を、パリパリと音を立てながら食べる。

台の上に缶ビールの空き缶が並んで二本立っているところを見ると、弱いならば、既に出来上がっている頃合いだろう。

だが、俺と遊星は元来強めのようで、アルコール度数7%くらいなら何本飲んだところで、ほろ酔い程度になるのが関の山だ。

一度、泥酔いしてみよう、と言う事になり、どこから持って来たのか、ビールからテキーラ、スピリタスまでもが俺の部屋に用意された事がある。

因みにスピリタスはアルコール度数96%の酒と言っているのか、薬品に使われる事もある、まんまアルコールの飲み物だ。

機会があったら……飲んでみるといい……。

その時の事はよく覚えていないが、泥酔いは出来たと言う事と、半端じゃない程楽しかったという事は少しも霞まず、俺の脳に張り付いている。

因みに朝起きた時、俺は遊星と一緒に肩を組みながら半裸の状態で、冷めた風呂のお湯に浸かっていた。

地獄絵図だった。

思い出したいくない事まで思い出してしまった。

俺は一気に缶ビールを煽る。

「聞きてーか？」

遊星がタバコの先端を向けながら言う。

副流煙がエアコンの風でモロに俺の顔面に吹いてくる。

「もったいぶんなよ？早く教えるよ？」

正直、遊星のゲームショップの息子という立場はいい。ゲームの情報がかなりの頻度で流れてくるのだから。

多分、その情報もかなり後に公開される物だろう。

期待し過ぎるとろくな事が起きない俺は、期待半分、失望半分のスタンスで話し始めようとする遊星を見る。

「実はな……VRHWで、初のMMOが出る。」

遊星の言葉に俺は一瞬心臓さえ止まったんじゃないか？と思える程の硬直をした。

だが、まだ聞かなきゃならない事がある。

俺は震える口をどうにか、アルコールで誤魔化しつつ、冷静に問いかける。

「…そ、それにRepranと何の関係がある？」

正直言ってしまうと、その時の俺はもう遊星の言わんとしている事に気づいていたのかもしれない。

「そのMMOがな…Repranの作品なんだよ。」

俺は内心の興奮を隠せぬ様に、遊星に詰め寄った。発売日や、運営側の企画者。値段に力を入れよう。これが酒が入っていたからなのかは知らないが、確かに俺の体は一度死にかけた興味を蘇らせた。た。

「しかも多分失敗はないぜ。何と言ってもRepranのFair y L a n d O n l i n e (F L O) の続編らしいからな。」

遊星がニヤリと笑うと、とんでもない事をさらりと告げる。

FLOとは、さっき言っただろうが、Repranの代表的なゲームだ。

俺が唯一本気ではまったMMO。

俺は高ぶる思いを抑え、痺れた脚の位置を変えながら飲みかけの缶に手を伸ばす。

残念ながら缶ビールじゃ酔えない。

でも、今はそれでよかった。

何せ、俺が缶ビールで泥酔いできてしまったら……俺の意識がはつきりしていなかったら……たちまち、この情報は夢の中の物になってしまいそうだったから……

俺はニヤニヤと上機嫌のまま、強めの炭酸を喉に通した。

第二話

VRHW。

(バーチャルリアリティハードウェア)

2045年になり、科学の最先端を行くハードが発売された。ゲーム機でありながら、399GBの容量を誇る、最新式だ。

今のゲーム機では、コントローラーと3Dタッチの応用、画質の進化や世界のネットワークへの接続が可能になっている。

今では仕事でさえもゲーム機で行える時代である。なので一概にたかがゲーム、と罵る事は出来なくなった。

これがPFGI・1089の本質だ。

3Dタッチ。これは画面に細かで特殊な蛍光板のパネル粒子を搭載する事で、スイッチ一つで文字が浮き上がり、それに接触する事で、距離計算と、温度探知でハードにデータを送り込むという物だ。

そのパネルや科学物質の完璧なる統合に苦戦し、開発発表は2040年まで持ち越されていた。

細かい事はよく分からないが、他にも問題点は多かったらしい。

初めてはパソコンで行われた。

当時は高価で取り引きされており、持っている人は、収入がいいか、ボンボンかの二択であった。

それが近年になり、安価でいて、色んな物に適応される事となった。その中にゲームもカテゴリーされているというわけだ。

そして、近年。

1947年。

ゲーム会社が前代未聞の発表をした。
バーチャルリアリティハードウェア
VRHW

これは最初、裏で医学や、軍用、はたまた、痛覚遮断を目的で作られた、仮想世界シミュレーション機器である。

フロントカバーの付いた、ヘルメットのような物で、それに付いて電極を指定された場所に装着する事で、準備完了だ。
これが発売された当時は世間で大いに騒がれた。

脳にアクセスするのだ。問題は無いのか？
値段は？容量は？

だが、そんな奴らの期待に背を向けるかのように、同時に発表された事実。

VRHW初のソフトはなんでもないただの、一人で遊ぶ、ゴルフやテニスと言う物だ。それに、遊ぶためには、役所に行き手続きを済まさなければならぬ。

それでも買う奴はいたそうだが、やはり、それでは若者の腹は満たされない。

今では電子機器の何かもが、3Dタッチだ。学校の黒板に、感度のいい、デスクパネル。
当然ゴルフやテニス、野球にサッカーだって走る事は出来ずとも、蹴ったりは出来る。

それに、リアリティもある。

なのでVHは発売当時売れ残りが溢れた。

それに、危機を感じた企業が抽選で出したり、格安で販売したりした。

流石に持つてる人は増えたが、やはり、ソフトなどは売れないようだった。

ソフトはやらないのに、ただただアップデートを繰り返して行く、そんな意味の分からない事が起き、ネットでも騒がれていた物だ。

だが、ついこの前。

VRHWの全機、オンライン接続が開始された。

持っている人は皆一様に、今更何故？と思ったはずだ。

なんせ俺もその中の一人だったのだから。

わけが分からず、混乱しながらも気にしない人たちの他にネットではこんな事が騒がれた。

ただのオンライン接続ではない。VRMMOが発売されるのではないかと。

そうしてネット上で、騒がれていた都市伝説は……

今日6月中旬、大手ゲーム企業。

”Repran”の新作ゲーム発表により、真実となった。

第三話（前書き）

誤字、脱字、ご感想などがございましたら書いて頂ければ光栄です。
m ((m

第三話

今は授業の合間だ。

俺はいつもの様に椅子に気怠げに腰掛けると、黒色のスクールバッグを漁る。

家を出る前に乱暴に突っ込んでいた携帯を探すために、ガサガサと朝から元氣一杯に腕を動かす。

指先に携帯端末の冷たさを感じると、俺はキーホルダーなどのストラップはつけておらず、遊び心のないメタリックブルーを取り出す。

今の”携帯端末”は昔に比べ、随分と種類が多くなった。

それも、TPPによる会社の激的な増量によるところだろう。

関税の掛かりの緩い商品は、出入りがスムーズになったし、何より、輸入輸出の頻度が昔より断然多い。

その甲斐あって、外国企業の伝染や、日本企業の進出などで、国々による全体会社数が圧倒的に増えた。

今では”携帯電話”と言っても、電話やメール以外に使う事が多くなり、今では携帯端末と呼ばれている。

まあ、略せばどちらも”携帯”なのだから、後の四文字、三文字は別に関係無いと見て大丈夫だろう。

俺が携帯端末の開帳ボタンを押すと、途端に不規則に折りたたまれたパネル一つ一つが動き、その液晶画面を露わにする。

素早く入力をこなすと、携帯端末の液晶画面がホーム画面からイン

ターネット接続画面へと、早々と移動する。

俺は検索ワード入力欄に、楽なアルバイト、と入れると、暑苦しくなって来た制服の袖を大胆に捲る。

そうして、大抵見つからない様な調べ物をしながら、俺はボケーと休み時間を浪費していた。

「なに調べてんの？」

これは暇な時間を過ごしたくない隣人が堪えきれず、俺に問いかけた言葉だ。

俺が首を持ち上げ、そちらに視線を送ると、何に対してか、首を傾げる隣人。

「アルバイト。」

俺が簡潔にその答えを示すと、面倒くさい感じに身を乗り出して画面を覗こうとする隣人。

隣人隣人言ってるが、本当に名前がわからないのだ。

多分これが俺のコミュニケーション能力の低さへとそのまま連結しているのだろう。

じゃあ、仮にこの女は山本さんにしとこう。

「何で？」

こっちは親切に教えてやったのだから、その答えぐらい自分で考える。と言いたくなるのは間違っているだろうか？

アルバイト。と答えたら金が必要、以外に何の理由があるのだろうか

か。

実際に友達が作りたいやら、彼女彼氏が欲しいなどという理由でバイトを始める程酔狂な奴は現代にはいないと思う。

だから、俺は山本の何で？と言う質問に対して、何で？と聞きたくなつた。

「金が必要なんだよ。それ以外に理由あるか？」

画面をスクロールさせながら適当な声色で返す俺。この態度はあつちに行け。という意思表示にちゃんとなつてくれてるだろうか。

「まあ、そうだよな……。あつ！そっすいえばウチが今バイトしてる店、他にも何人が雇いたいとか言つてたよ？」

どうやら、俺の必死の懇願はなんの意味もなさなかつたらしい。だが、その代わりに何か美味しい話が目の前にある気がしてならない。

「時給は？てかどんな仕事？」

インターネットでもしっくりしたのがヒットしていない俺にとって、こつという話は大歓迎の一言だ。

「ファミレスだよ。P u k k a。」

P u k k aとは、その店品の完成度の高さから結構な人気を誇る、今日本でチェーン店の多さが上位にランクインされているファミレスだ。

因みに読み方は”プッカ”だ。

「へえ。時給どんぐらい？」

俺が聞くと、ニヤリと笑ってトコトコと俺に近づいてくる山本。
一瞬身構えたが、どうやら、耳打ちするための行動らしい。

周りにいる奴はそんな気にするほどでもないと思うが、まあ俺はそれに従う。

そして、鼻に伝わる女子高生特有の甘い香りとともに、耳に伝わる吐息。

少し柄にもなく緊張したが、気にせず耳から伝わる情報を脳に伝達する。

「――。」

「……決めた……P u k k aで働く。」

俺の耳が聞いたのは、高校生には少々刺激が強いのではないか？と思える程の金額量だった。

「フフ、じゃあ店長に言っとく。」

人付き合いがこんなところで役立つとは思わなかったが、俺は今でも変わらず使われているお礼の言葉を精一杯の感謝を込めて、目の前の女子に送る。

「ありがとうございます。山本さん。」

敬語を使う事など滅多にない俺だ。おちよくってる様に聞こえるが、本心はそんな事は無く、感謝でいっぱいだ。

俺が言うと、何故か微妙な表情をしたまま、山本は俺の顔を見る。

「山本って誰？」

そりゃそうだ。

と思いながらも、俺は必要の無くなった携帯電話にお休みを告げるかの様にスイッチOFFのボタンを押した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0901x/>

NOW Loading.....

2011年11月30日22時53分発行